

2024（令和6）年度 自己評価・学校関係者評価報告書

2025（令和7）年3月8日

学校法人雲柱社 松沢幼稚園

1. 本園の目標

- ・キリスト教に基づく保育（自らを尊び、他者を尊ぶ）
- ・遊びを大切にする保育
- ・自然を感じる保育

2. 本年度重点的に取り組む目標・計画

① 保育の見える化と配信

- ・ホームページやInstagramを充実させ、松沢幼稚園の保育を「見える化」する。また保護者による保護者目線のInstagramも開設する。
- ・地域の中で世代を越えて繋がり、子どもたちのことを一緒に考え、見守っていくために「すすくメッセ」に参加する。またその機会に、松沢幼稚園を知ってもらう。

② 幼児教育の内容、方法の改善

《身近な自然に触れ、自然の良さに気付く》

- ・園庭の落ち葉を集めて子どもたちと腐葉土を作り、その土で野菜や花を育てる。
- ・保護者も腐葉土に関心を持って貰えるよう、活動を共有していく。
- ・腐葉土の中に住む虫について知る。
- ・自然観察体験により、季節に応じた自然の変化を感じ取る。
- ・専門家を招いてビオトープを作り、管理し、定期的に学びの時を持つ。

《言葉を育てる》

- ・文庫活動をされている方を招き、定期的にお話会を開催する。
- ・専門家のアドバイスを受け、子どもたちに質の良い絵本を読み聞かせる。

③ 家庭、地域における幼児教育の支援

- ・新しくサッカー教室を始める。（課外教室）
- ・夏休みに預かり保育を実施する。
- ・「定期的預かり保育」を始める。
- ・引き続き、長期休暇にはワークショップを企画する。
- ・保護者、地域の子育て世帯を対象に、専門家による「言葉を育てる」講座を定期的
に実施する。
- ・子育て支援の一環として、引き続き専門家を呼び、未就園児プログラム「わらべ

歌」「ベビーマッサージ」「ヨガ講座」「絵本講座」等企画していく。

④ 家庭、地域における幼児教育の支援

- ・新しくサッカー教室を始める。(課外教室)
- ・夏休みに預かり保育を実施する。
- ・「定期的預かり保育」を始めた。
- ・引き続き、長期休暇にはワークショップを企画する。
- ・保護者、地域の子育て世帯を対象に、専門家による「言葉を育てる」講座を定期的に実施した。
- ・子育て支援の一環として、引き続き専門家を呼び、未就園児プログラム「わらべ歌」「ベビーマッサージ」「ヨガ講座」「絵本講座」等企画していく。

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

	評価項目	評価	取り組み状況
1	保育の見える化と発信	A	・ホームページでは、園だよりの巻頭言や未就園児へのお知らせ等、その都度掲載した。また、保育の様子は、Instagramに掲載し「見える化」に努めた。Instagramでは、500~1,000ぐらいの再生数があり、ハーモニカの奏者寺澤ひろみさんを招いて行った誕生会のInstagramは、2,700以上の再生数があった。 ・現在フォロワーは240人。 ・未就園児事業については、ホームページ、ポスター、Instagramで周知した。参加者数は、どの方法もほぼ同じぐらいだった。
2	幼児教育の内容、方法の改善	A	《身近な自然に触れ、自然の良さに気付く》 ・卒園生保護者の方による「土のがっこう」が計8回行われた。 1回 実のなる木の苗を植えよう 2回 しがら花壇作り、野菜の苗を植えよう 3回 しがら花壇作り、花の苗を植えよう 4回 桜の木を助けよう 5回 木の苗のポットを作ろう 6回 冬野菜を植えよう 7回 どんぐりポットを作ろう 8回 鳥が来る木を植えよう ・土のがっこうでは保護者にも参加を呼び掛けた。最初のころは参加者が少なかったが、回を重ねるごとに参加者が増えていった。それと同時に保護者の関心も深まり、土のがっこうを経験した子どもたちの家での様子なども報告された。 ・土のがっこうを通して、子どもたちの自然に対する興

			味が湧き、さまざまな発想が生まれた。そこで東京都のプログラム「すくわくプログラム」に応募して、子どもたちの発想を形にした。 ・年長組が野菜や花の苗を植えた経験から、子どもたちの中には種に興味を持ち始めた子が現れた。その子どもたちは自ら園庭に畑を作り、種から芽が出た植物に毎日水をやり、葉っぱの世話をした。また、図鑑を見ながら植物の育て方を調べる様子も見られた。 ・この活動は他の学年にも影響を及ぼし、自分の種と一緒に植えて欲しいと頼む子や、他の場所に自分の種を植えてネームプレートを立てる子もいた。 ・腐葉土を掘り返したところ、コガネムシの幼虫が大量に出てきた。そこで虫かごに入れ、年長組で飼うことにした。 またすくわくプログラムの活動から、虫に興味を持ち、自ら図鑑を作り、年長の子どもたちで共有した。 ・保護者も腐葉土に関心を持って貰えるよう、活動を共有した。 土のがっこうが行われた日は、その日のうちに写真とその日の活動を掲示板に張り出した。どんぐりポットづくりの時は、園だよりを通して、どんぐりを拾ってくるよう家庭に投げかけた。 ・腐葉土の発酵を促進させるために、家庭からお米のとぎ汁を持ってくるよう協力を呼び掛けた。 ・これらの活動により、子どもたちが、自分の感じたことなどを躊躇なく発言できるようになった。また、花の蕾や飛んでいる鳥など、子どもたちが自ら自然に目を向けている様子が家庭から報告されている。 《言葉を育てる》 ・祖師谷で長年文庫活動をしておられる「山の木文庫」の方々を招き、学期ごとに。各学年へのお話会を開催した。 ・専門家のアドバイスを受け、子どもたちに質の良い絵本を読み聞かせた。 ・文庫活動をしている職員によるお話会を定期的に行った。
--	--	--	---

3	課外活動、未就園プログラム、長期休暇等の見直し	A	・新しくサッカー教室（課外教室、小学生クラス、年長クラスそれぞれ週1回グラウンドにて）を行った。年長クラスは、他のチームとの対抗試合も行った。 ・夏休みに預かり保育を計15回実施した。 ・「定期的預かり保育」を始めた。 週1日、2歳児の子どもだけを預かる世田谷区の「未就園児の定期的預かり事業」を始めた。最初は半期の予定だったが、保護者からの要望もあり通年に変更した。 ・保護者、地域の子育て世帯を対象に、専門家による「言葉を育てる」講座を定期的に実施した。 1回「読む力」の土台をつくる絵本との出会い —「文字の文化」の前に「声の文化」で土台を堅固に 2回「かがく絵本はワンダーの宝箱」 3回「AI時代にこそ大切な土台作り —子どもと昔話—」 参加者からは高評価を得た。 ・子育て支援の一環として、昨年に引き続き専門家を呼び、未就園児対象の「わらべ歌」「ベビーマッサージ」を行った。プログラム後は、そのまま部屋を解放し、子育てについて、園長と話す時間を持った。 ・未就園児親子を対象にクリスマススワッグ作り講習会を開催した。 ・移動動物園を呼び、在園、未就園児共に動物とのふれあいの時を持った ・未就園児のために園庭を開放し、園児と遊んだり、一緒にリズム遊びをしたりして交流を深めた。 ・長期休暇にはワークショップを開催した。（楽器を作って遊ぼう、色水でアートセラピー、親子で折り紙、夏休みスペシャルお話会、親子ダンス、ランニング教室、サッカー、器械体操、石鹸デコパージュ、空手）
---	-------------------------	---	---

評価A.十分に成果があった B.成果があった C.少し成果があった D.成果がなかった

4. 総合的な評価結果

A	本年度は、ホームページやInstagramを通じた情報発信により保護者や地域との交流を深め、また子どもたちに自然と触れ合う機会を提供することで、彼らの成長を支える取り組みを行った。保護者の参加も増え、家庭での活動報告も多く寄せられている。さらに、言葉の育成を重視したプログラムや多様な課外活動を実施し、子どもたちの多方面の興味や関心を引き出すことに成功した。総じて、子どもたちの自主性や表現力が向上し、保護者からも高い評価を得た。
---	--

2. 今後取り組む課題

	課題	具体的な取り組み方法
1	保育の見える化と配信	・インスタグラムやホームページを活用し、保護者や地域の方々に保育の様子を「見える化」して配信することに努める。園の活動やイベントの写真や動画を随時アップロードすることで、子どもたちの日々の成長や園での楽しそうな姿を共有し、保護者が安心して園の様子を確認できる環境を整える。 ・未就園児へのお知らせやイベント情報も積極的に発信し、地域とのつながりを一層深める。 ・これらの取り組みにより、保護者と園のコミュニケーションをより密にし、共に子どもたちの成長を見守り、支えていくことを目指す。
2	幼児教育の内容、方法の改善	・東京都の「すくわくプログラム」に基づき、新しくテーマを決め、テーマに沿った子どもたちの興味や関心に応じた探究活動を実践する。 ・昨年に引き続き、「土のがっこう」を開催するが、本年度の反省を踏まえ、方法や内容を改善し、探究を進める。 ・昨年に引き続き保護者、地域の子育て世代対象に、専門家による「ことばを育てる」講座を定期的に行う。保護者と地域の子育て世代が言葉の発達について学び合う場を提供し、子どもたちの健やかな成長を支える。
3	満3歳児保育への取り組み	・新しい試みとして、満3歳児保育を開始する。 ・2歳児向けのカリキュラムを作成し、3歳児保育へとスムーズに繋げていくよう目指す。 ・2歳児から3歳児への移行期においても、子どもたちが安心して新しい環境に適應できるよう、保育内容や方法を工夫し、一人ひとりの発達段階に合わせた支援を行う。

※1月22日、2月19日2回の職員会議にて、自己評価委員会を実施した。

学校関係者評価委員会の評価

- ・保育の見える化では、インスタグラムの動画での保育の様子はわかりやすく、再生回数フォロアーも大きく増えていることから見える化が前進している。
- ・「土のがっこう」すくわくプログラムでは、子どもたちが自然の土や虫や植物に、自ら興味を示し、成長している様子が見られ、幼児教育の改善が進んでいると評価できる。
- ・地域との関りについても、預かり保育、子育て支援、様々な講座やワークショップが開催され地域のニーズに応えている。
- ・自己評価委員会を実施した会議記録も加えたほうがよい。そしてホームページにも掲載した方がよい。
- ・すくわくプログラムは、広い範囲のテーマに設定し教材費の充実に活用したらよい。